

昭和9年、10年の隠岐探訪からみるアチック・ミュージアム資料

Documents of the Attic Museum as Seen from the Oki Survey in 1934 and 1935

檜村 賢二

KASHIMURA Kenji

要 旨

アチック・ミュージアムは、民俗、民具、漁業史をはじめ多くの研究成果・資料を残し、後続の研究者が歩むべき道を示した。しかし戦中戦後の混乱によりアチック・ミュージアムの収集資料は分散し、長く研究者による活用は難しかったものもある。

本稿では、昭和9、10年のアチック・ミュージアムの隠岐調査関係資料を中心に、その地道な資料の検討から見えてきたことを紹介するとともに、その資料性を確認し、分散防止、分散したとしても再構成が可能とする方法と重要性を検討する。

まず『隠岐島前漁村探訪記』から隠岐調査そのものの概要と意味を検討し、渋沢の社会経済史重視の姿勢と、隠岐再探訪の成果物であるモノグラフ・調査報告など文字資料、民具資料、アチック写真など画像資料、通称渋沢フィルムという映像資料という大きく4種類について確認する。また渋沢敬三は、これらの資料は博物館を拠点として保存、研究、公開を考えていたと思われるが、不運にも分散した結果、神奈川大学日本常民文化研究所、渋沢史料館、国立民族学博物館、宮本記念財団など各組織の所蔵となり、その努力によって整理、公開、研究が進められている。その分散した資料を統合することが、より研究に寄与することは明らかであるが、重要なメタデータが少なく資料統合が容易でない状況にある。それは今後の研究資料においていかにメタデータを残すことが重要であることを確認することにもなった。今回は特に民具資料、写真資料について明らかになったことを報告し、また個人的に関心を抱くかつて盛んだった隠岐における肥料藻の採集・利用について、隠岐探訪に関する資料から研究の前進を期待したが、その成果は乏しくアチック・ミュージアム関係資料の限界も確認することになったことを述べる。

【キーワード】 アチック・ミュージアム資料、メタデータ、情報統合、肥料藻

1. はじめに

アチック・ミュージアムは、民俗、民具、漁業史をはじめ多くの研究成果・資料を残し、後続の研究者が歩むべき道を示した。しかし戦中戦後の混乱、アチック・ミュージアムの収集資料は分散し、長く研究者の活用は容易な状況ではなかったものもある。

渋沢敬三がアチック・ミュージアムの活動を通じて収集した資料を統合するような博物館は、残念ながら実現しなかった。アチック・ミュージアムの活動が残した書籍（報告書やモノグラフ [民俗誌]、論文など）、写真資料、映像資料、民具という成果物・資料のうち、刊行物は全国の図書館などで比較的容易に確認できるが、そのほかの写真資料、映像資料、民具は、神奈川大学日本常民文化研究所、渋沢史料館、国立民族学博物館、宮本記念財団などに分かれて所蔵されている。アチック・ミュージアムの活動を通じて収集した資料を統合するような博物館という理想像は、不運にも切り分けられ各地に分散した。その分散した一つ一つ資料はあたかもパズルのかけらのように思える。

今回の研究グループの作業は、そのパズルのわずかな絵や形状から本来あった場所を探し、求めるような作業であった。パズルの一かけらに秘められたデータや事実は、パズルが少しずつ組み上がっていくことによって明らかになっていった。

本稿では、アチック・ミュージアムの隠岐調査関係資料を中心に、その地道な資料の検討から見えてきたことを紹介するとともに、資料性を確認し、分散防止、分散したとしても再構成が可能とする方法と重要性を検討したい。

2. 隠岐採訪

アチック・ミュージアムによる隠岐採訪の理由については、昭和10年8月第2回調査に参加した山口和雄は以下のように述べている。

隠岐の島前に安達という大きな漁業家がおりました。(中略) その糸満の連中が安達家にひと夏雇われて隠岐にやって来て、彼らの舟と漁具で漁業をやる。わざわざ沖縄まで行かなくても、隠岐に行けばそれがみられるから、それをひとつ調べたらどうかということと、それから隠岐は日本で三圃制農業の行なわれている唯一の場所といわれているので、その牧畑農業も見聞しようという点もあったり、まあいろいろなことがありまして、隠岐へ言ってみたらという渋沢さんの発案で出かけたのです。[山口 1978 57～58]

この時期、アチック・ミュージアムは民具研究を本格化する時期である。桜田勝徳と山口和雄(調査には岩倉市郎も参加)によって編集された『隠岐島前漁村採訪記』[アチック・ミュージアム 1935]には、多くの漁具のイラストが記載される。この国立民族学博物館のアチック・ミュージアム・コレクションを確認すると隠岐採訪をきっかけに収集された民具が確認できる。

『隠岐島前漁村採訪記』(以下『採訪記』と記す)の序には、アチック・ミュージアムと隠岐の交渉について、昭和9年5月に鹿児島県十島村採訪の帰途に、渋沢子爵以下数名が島を訪れたことに始まるとしている。この際一行が「民俗学、経済史上よりみて隠岐島前が特に研究に値することを感知」したとある。調査結果は、以下の七部構成になっている。

第一部 部落と家

第二部 漁業

第三部 農業

第四部 船

第五部 信仰生活

第六部 速記録

第七部 語彙

第一部は、桜田勝徳が旧家、仮親、若者組やムラの共同作業など社会組織を中心に、「若宮」という屋敷神など信仰分野にも及ぶ内容を記載している。

第二部は、山口和雄が島前三島の一部の漁具、漁法のみならず、その沿革や経営、販売に至るまで調査し、不完全であるとしながら島前漁業史の一資料としている [アチック・ミュージアム 1935 : 35]。

第三部は、山口和雄が執筆し、隠岐には牧畑耕作があり農業史上、特殊な地位を占めるが、今回は糸満人及び漁業の調査を主としたため農業は十分な調査ができなかった。そのため断片的な聞き書きを羅列するとしながら [アチック・ミュージアム 1935 : 102]、水田、畑作、肥料について、またイモグラなどの貯蔵方法、牛の飼育や地主、小作関係などについても報告する。

第四部は、山口和雄が担当し、隠岐が帆船時代には北前船の有数な風待ち港であったため、北前船、島前の千石船といわれる廻船並びに漁船に関して記述している。 [アチック・ミュージアム 1935 : 124]

第五部は、桜田勝徳が執筆し、年中行事、神祭と俗信、舟漁に関する信仰等について記述している。 [アチック・ミュージアム 1935 : 137~154]

第六部は速記録である。「漁場争い」について西ノ島浦郷の今崎半太郎からの聞き取り、「船越問答」は西ノ島船越の多岐にわたる話題を平木由太、中本夫妻、安達本家の老媪から聞き取りし、それを桜田勝徳が執筆とある。速記を行なった岩倉市郎が前文として、

速記が甚だ未熟な為、折角面白い会話を聞き乍ら、書漏しの多かった事は遺憾である。が之れを軽い気持ちで、採集風景のスナップと言った位の程度で眺める時は、別の意味で多少御参考になる事もあるかと考える。それで特に加える事を控え、ノートのまま採録した次第である。(岩倉)

と述べている。 [アチック・ミュージアム 1935 : 135] 速記は岩倉市郎が担当したにもかかわらず、執筆はあくまで桜田勝徳とする。

第七部の語彙は執筆者不明であるが、漁業と農業など全般的な記載を考えれば、おそらくは山口和雄と桜田勝徳の共同作業に依るものではないかと思われる。この語彙には記載内容に対応する「語彙附図」があり、この中の「アグリツツ」「コザキ」「ツカリ」などは現在も国立民族学博物館のアチック・ミュージアム・コレクションに収蔵されている。国立民族学博物館の資料を確認すると、網針を入れる竹筒であるアグリツツ (標本番号 H0017296) は、採集者が桜田勝徳・山口和雄であり最大長が35センチメートルで『採訪記』に記載されるものと一致する。一方、磯の海苔を採取して入れる容器であるコザキを確認すると『採訪記』には長径1尺5寸位 (約45cm) とあるが、国立民族学博物館所蔵のコザキは採集者桜田勝徳・山口和雄、採集地島根県知夫郡黒木村大字船越とあるが (標本番号 H0017314) は縦横が約23~24cmで一致しない。調査資料と採集資料が必ず一致するわけではない。

この『採訪記』は日本において初期のモノグラフともいえる内容である。隠岐は隠岐の国であり、さらに島前と島後に大別されるが、その島前全体を扱いつつ、それを構成する西ノ島、中ノ島、知夫里島の三島について「如何なる点に於て等しく如何なる点で異なるかを審かにする事は勿論出来なかったが、牧畑経営、土地所有らの変遷に就ては、海士村が他の二島と幾分その事情を異

にしているのではないか」とし、言語については知夫里が他の二島より訛りが少なく判りやすいことを指摘している [1935 序]。

のちに村落空間論の契機となる指摘を行なう桜田勝徳が [桜田 1958 : 15~38]、30歳過ぎの若い研究者であるときにフィールドワークに基づき、モノグラフともいえる書籍に執筆にかかわっていることは重要であり、のちの村落組織研究の中核を担う福田アジオによる個別分析法や宮田登の地域民俗学につながる点も重要であろう。

3. 社会経済史の重視

渋沢敬三が中心となるアチック・ミュージアムのモノグラフ、報告書には「経済史」「社会経済史」という言葉が見られる。渋沢は早川孝太郎のモノグラフ『花祭』 [早川 1930] について高い評価をしつつ、「早川君の花祭の力作はどこまでも感心するが、自分に物足らぬ感じが今なおしているのは、この行事に対する社会経済史的な裏付のなかったことである」 [渋沢敬三 1992 : 13~14] としている。また、早川の著書『花祭』が再刊にあたって渋沢はそれに寄稿し、「本著の出現で早川さんの民俗学における能力は高く評価されたが、いろいろ話し合っているうちに、花祭の奥に、また基底にある宗教学的または社会経済史的、更には農村地理学的面についての解明に不十分な点も感じられた」 [早川 1958] と、重ねて「社会経済史」という面に不足があったことを繰り返し指摘している。

この渋沢敬三の「社会経済史」というキーワードは、そのアチック・ミュージアムにおける民俗学、民具研究にも大きな関係があると考えられる。それは人々が1年の大半をイエ・ムラなどの社会単位における経済活動、つまり「暮らし」のための労働に従事しており、その「暮らし」があってこそ1年の数日である「花祭」のような祭事・芸能が生まれ、維持されてきたという渋沢の考えがあるのだろう。その「花祭」を支える日常の「暮らし」が明らかにならなければ、モノグラフとしては不完全ということである。

隠岐探訪において渋沢が中心に据えた人物が経済史の山口和雄、そしてのちに漁村生活や漁業技術を専門とする桜田勝徳であり、完成した『探訪記』においても「部落と家」「漁業」「農業」を優先し重点を置く構成は、まずは隠岐島前の組織、経済を明らかにすべきという渋沢の意思であろう。

4. 隠岐探訪の成果物

宮本馨太郎は、昭和戦前期のアチック・ミュージアムの民具研究について、以下のように述べている。

昭和八年一二月、二階建の新館屋が建築され、収蔵民具と研究員がここに移って、アチック・ミュージアムは文字通りのアチック（屋根裏）ではなくなった。この頃、渋沢と同人たちによる探訪旅行はようやく頻繁に行なわれたが、就中、画期的な調査旅行は昭和九年五月に実施された薩南十島の調査であった。これには渋沢をはじめとしてアチックミュージアムから早川孝太郎・高橋文太郎・桜田勝徳・村上清文・小川徹・宮本馨太郎、これに鈴木醇・那須皓・宇野円空・三宅宗悦・小出満二・木村修三・江崎悌二・竹内亮・谷口熊之助・永井亀彦・同竜一など専門学者が参加し、村営汽船十島丸（一五〇トン）により竹島・硫黄島・口ノ永良部島・口之島・中之島・諏訪之瀬島・平島・小宝島・宝島・奄美大島・加計呂麻島などを探訪・調査するとともに、各島の民具を多数採集した。このほかアチック・ミュージアム同人の探訪調査は全国各地にむかって行なわれた（後略） [宮本 1969 : 202-203]

『隠岐島前漁村探訪記』の序には、アチック・ミュージアムと隠岐の交渉について、昭和9年5月に鹿児島県十島村探訪の帰途に、渋沢子爵以下数名が島を訪れたことに始まるとしている。そして、

この際一行が民俗学、経済史上よりみて隠岐島前が特に研究に値することを感知し、他日機会あればこの島をいろいろな方面より総合的に研究しようと考えていた。然るに我々は本年（昭和10年）四月同地の安達和太郎氏が上京の折、同氏より沖縄の糸満漁夫が今夏島前に出漁すると談したので、之れを機会とし此漁業と島前漁業の調査を目的として此地に旅行した〔アチック・ミュージアム 1935：序〕

とある。隠岐探訪は、宮本馨太郎が民具研究において画期的な調査旅行とする薩南十島調査の延長にあった。またアチック・ミュージアムの新館完成とともに活発な民具の収集活動も行なわれており、当然隠岐探訪においても民具収集は大きな課題であったと思われる。

隠岐の二度にわたる探訪は、漁業を中心としつつ、隠岐の三圃式農業も視野に入れ、聞き取り調査によるモノグラフ『隠岐島前漁村探訪記』、写真資料「アチック写真」、動画による記録映画「隠岐之島 景観 昭和九年五月」、現地で収集した民具「アチック・ミュージアム・コレクション」という大別して4種類の成果物・資料となった。

5. 成果物の融合と博物館

本共同研究の大きな目的はこのモノグラフ等の文字資料、写真資料、映像資料、民具資料という4種類の成果物・資料の概要、個々の資料のデータを可能な限り明らかにして、より誰もが活用しやすい資料とすることであると受け止めている。

文字資料はこの中で、中核となる資料である。現在、確認することが最も容易でこれを読むことによって隠岐探訪の概要を知ることができる。

写真資料は、『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol. 6』〔神奈川大学日本常民文化研究所 2012〕によってその資料活用の利便性が格段に向上し、本研究によってもさらに利便性が向上することであろう。

記録映画「隠岐之島 景観 昭和九年五月」などの映像資料は、神奈川大学デジタルアーカイブス (<http://kdarchive.kanagawa-u.ac.jp/archive/>) によって、インターネット上で見るようになる。

隠岐探訪で収集された民具は、国立民族学博物館に収蔵されており、標本目録データベース (<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/mo/mocat.html>) に含まれているが、公開されている情報では、それがアチック・ミュージアム・コレクションであることを確認することはできない。隠岐探訪における収集民具は、国立民族学博物館に直接問い合わせをしてインターネット上は非公開のデータから辿ることになる。隠岐探訪関係資料では、最も外部者にとって研究利用が難しい状況である。

アチック・ミュージアムの隠岐探訪を総合的に研究しようとするときに障害となるのが、資料が分割されている状況にある。『隠岐島前漁村探訪記』（以下『探訪記』と記す）は多くはないが全国の図書館に収蔵されており閲覧可能である。アチック写真と記録映像は神奈川大学日本常民文化研究所を中心に所蔵し、関連する民具は国立民族学博物館が所蔵している。そのほか隠岐探訪に関連する映像資料や渋沢敬三の手帳などは渋沢史料館が所蔵しており、分散している。資料分散については歴史的に止むを得ない経緯があることは承知しているが、研究の振興のためには情報が統合されることが望まれる。

渋沢敬三を中心としたアチック・ミュージアムは、これらの資料を有効に統合させる器が博物館であると考えたのだろう。しかしアチック・ミュージアムから蒐集民具1万点以上を引き継ぎ資料の収蔵、統合の拠点となるはずであった日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）は最終的に経営的に行き詰まり、1962（昭和37）年に閉館してしまう。1962年から1975（昭和50）年まで文部省史料館で保管されてから国立民族学博物館に移管され現在に至っている。また写真、映像はアチック・ミュージアムから財団法人日本常民文化研究所を経て、神奈川大学日本常民文化研究所に引き継がれ、写真、映像は徐々に整理・調査が継続され、公開も進んでいる。

アチック・ミュージアムは民間研究機関であり、そしてその時代は今日のように情報化された時代とは異なることから、写真や映像の目録作成（データベース化）が難しい状況にあったことを承知する。モノグラフ作成に携わった採訪者、記録写真の撮影者、映像の撮影者、民具の蒐集者が広く社会に提供されるべき学術資料として資料批判が可能なメタデータ⁽¹⁾をどれほど残しているか、それが整理されているかが問題である。我々研究グループはこのデータの検索、また検証を行なっている。この場合、まず『採訪記』など文字資料が核となり、アチック写真についてはわずかに写真の台紙やアルバムにある説明記述から撮影場所や対象物、撮影者などを特定し、また旅譜から撮影場所の推定・特定を行なった。映像についても『採訪記』、アチック写真のデータ、旅譜等から連動して撮影場所や対象物が特定できる箇所が増えている〔神奈川大学日本常民文化研究所2012〕。

民具資料の国立民族学博物館所蔵アチック・ミュージアム・コレクションについては、国立民族学博物館によって独自に整理され、研究も継続されている。今回、『採訪記』を熟読し、アチック写真と記録映画「隠岐之島 景観 昭和九年五月」を確認しながら、隠岐の島で蒐集されたことがわかる民具を確認すると、現在、国立民族学博物館の目録では使用方法などが不明であった「アグリッツ」などは、『採訪記』の「第七部 語彙」に「アグリ 漁網を編む編針。之を入れる竹筒をアグリッツという」と、使用方法の説明、「語彙附図」にはその略図と法量の記載があり〔アチック・ミュージアム 1935：182〕、資料のデータの肉付けができた。

また隠岐島前から約100キロメートル離れた鳥取県東伯郡湯梨浜町泊は、現在も1945年以前に隠岐島後に家族で出稼ぎ漁に出かけたことがあるという漁師がいる場所であるが、1938年（大正13）生まれの元漁師によれば（2017年6月聞き取り）、自分は使用したことがないがアグリッツというものを使っているのを見たことがあるという。アグリ（泊ではアミバリという呼称が中心）で網を修理するときには多種のアグリを使用する。アグリは箱に入れることが多いが、長く大きな網を端から端まで修理するときには、アグリの入った箱を持ち運ぶのは手間なので、アグリッツを腰に下げてアグリを交換しながら修理をおこなっていたという。よってアグリッツに見える紐は腰に下げられるためのものであることが判明した。このように民具と文字資料など異なる資料、場合によっては伝承地以外の類似した環境、近接地における聞き取り調査の成果によっても情報を相互補完してい

くことが重要である。

また西ノ島ふるさと館（隠岐郡西ノ島町）と隠岐郷土館（隠岐郡隠岐の島町）の民具を比較すれば、さらなる情報の付加も可能である。

結局は性格・性質の異なるモノグラフ等文字資料、写真や映像資料、民具資料とそのメタデータを総合、統合することによって相互補完することができるということである。

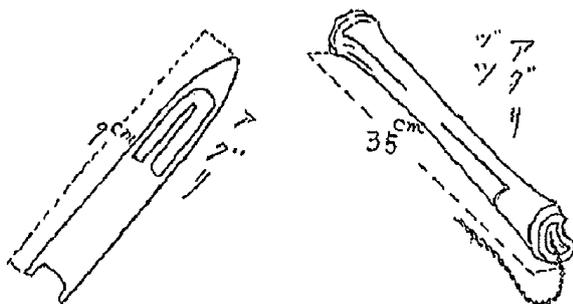


図 アグリとアグリッツ（『隠岐島前漁村採訪記』182頁）

6. 民具研究か民具学か——アチック・ミュージアムの重視した民具資料——

アチック・ミュージアムの大きな功績は、民具を資料として定着化させたことにある。よって隠岐調査において注目、収集された民具に大きな関心を持つが、研究の大きな方向性として民俗学その他の補助的な民具研究とするか、あくまで民具学として独立するかという問題がある。ここにて結論を出すことはできないが、アチック・ミュージアムにおいて民具研究が活発化していた隠岐調査当時は、民俗学とは一定の距離を置きつつも、密接なつながりをもっていたと思われる。

1937年（昭和12）に出版された『民具問答集』の巻末付録には「民具蒐集調査項目」がある。これにより今日まで民具研究と有形民俗文化財にかかわる行政に活用され続けている民具の定義と分類が示された。

一 衣食住に関するもの

1. 家具 2. 灯火用具 3. 調理用具 4. 飲食器具 5. 衣服 6. 履き物 7. 装身具
8. 出産・育児具 9. 衛生・保健用具

二 生業に関するもの

1. 農具 2. 山樵用具 3. 狩猟用具 4. 漁撈用具 5. 紡織、染色に関するもの 6. 畜産用具…博労関係のものを含む 7. 交易用具

三 通信・運搬に関するもの

1. 運搬具 2. 行旅具 3. 報知具

四 団体生活にかかわるもの…若者宿の道具や地割道具を含む

五 儀礼に関するもの

1. 誕生より成年式までのもの 2. 婚姻関係のもの 3. 厄よけに関するもの 4. 年祝いに関するもの 5. 葬式や年忌に関するもの

六 信仰・行事に関するもの

1. 偶像 2. 幣束類 3. 祭具および供物 4. 楽器 5. 仮面 6. 呪具 7. 卜具 8. 祈願具

七 娯楽・遊戯に関するもの

八 玩具・縁起物

また柳田國男は1935年（昭和10）の『郷土生活の研究法』では民俗資料を、「第一部、有形文化」「第二部、言語芸術」「第三部、心意現象」に三分類したことはよく知られる。

またその中の「第一部、有形文化」は以下のように分類している。

- (1) 住居 (2) 衣服 (3) 食物 (4) 交通 (5) 労働 (6) 村 (7) 連合 (8) 家 (9) 親族 (10) 婚姻 (11) 誕生 (12) 厄 (13) 葬式 (14) 年中行事 (15) 神祭 (16) 占法 (17) 呪法 (18) 舞踊 (19) 競技 (20) 童戯と玩具

この渋沢敬三の「民具蒐集調査項目」と柳田國男の「有形文化」項目を照合すると〔表1〕のようになる。その内容と順序は一部ズレがあるが、かなり一致する。当時、アチック・ミュージアムには相当数の民具が収集されており、その実際収蔵する民具の実態と柳田による「第一部、有形文化」分類の調整が行なわれた可能性があろう。また柳田が「(4) 交通」「(5) 労働」としたものを

表1 渋沢敬三の「民具蒐集調査項目」と柳田國男の「有形文化」項目の比較

昭和12年渋沢敬三の「民具蒐集調査項目」	昭和10年柳田國男の「有形文化」
一 衣食住に関するもの	(1) 住居、(2) 衣服、(3) 食物
二 生業に関するもの	(5) 労働
三 通信・運搬に関するもの	(4) 交通
四 団体生活にかかわるもの	(6) 村、(7) 連合、(8) 家、(9) 親族
五 儀礼に関するもの	(10) 婚姻、(11) 誕生、(12) 厄、(13) 葬式
六 信仰・行事に関するもの	(14) 年中行事、(15) 神祭、(16) 占法、(17) 呪法
七 娯楽・遊戯に関するもの	(18) 舞踊、(19) 競技、(20) 童戯と玩具
八 玩具・縁起物	(20) 童戯と玩具

渋沢は「二 生業」「三 通信・運搬」と順序を入れ替えていることは生業、つまり経済重視のあらわれであり、「(20) 童戯と玩具」とした項目を渋沢は「七 娯楽・遊戯に関するもの」と「八 玩具・縁起物」という二項目に分類したことは、アチック・ミュージアムの起こりと関係する「玩具」へのこだわりとも見ることができる。

これからは渋沢が民具研究と民俗学の関係を緊密にとらえており、民具を学術資料とすることを目指す一方、民俗学とのかかわりから調査項目を設定している。民具を学術資料として民俗学以外の広い分野に活用を願っていたには違いないが、活用を期待していたのはまず民俗学であったといえよう。

しかしその後、民俗学は民具を資料として活用してきたか、重視してきたかというところはいえない現実もあった。民具学を提唱し、民俗学から民具学を引き離す宮本常一の主張は、以下のとおりである。

民俗学の中で民具は正しく取り扱われたであろうかという点必ずしもそうではない。どのような民俗誌をよんでみても民具にふれることはきわめて少ない。しかし生産や生活の文化や技術を見てゆこうとすると、民具を通じて見るのが一つの重要な手段であり方法であると思う。ちょうど歴史学者たちが考古学資料に比較的関心のうすいことと相似ている。(中略) それでは考古学は歴史学の補助学であろうかと言うことになるが、その調査と研究には独自の方法が用いられ、それらの方法を通じて文化の発展過程を明らかにしてきた。[宮本 1979: 11~12]

宮本常一の憤りと民具学確立の意思が伝わる言葉である。民俗学も民具研究をおこなってきた実績がある。上江洲均の『沖縄の暮らしと民具』[上江洲 1982]、小野重郎の『南九州の民具』[小野 1969] や石塚尊俊の『出雲隠岐の民具』[石塚 1971] のような民俗学者の成果もあり、民具研究を推し進めている。あくまで参考事例であるが、文化財行政において国の重要無形民俗文化財は 296 件、民具が中心となる重要有形民俗文化財が 217 件であり、かなり均衡している (2017 年 3 月 1 日現在)。文化財制度上は民俗の中に民具が包括されている。

一方で民俗学の中で民具研究をする研究者は極めて限定されるのも事実である。民俗の聞き取り調査は簡単ではないが、民具調査というものも、やってみるとかなり難しい。信頼を得て個人宅の屋敷や蔵などに入れていただき、民具を確認することは容易ではなく、個人でコレクション化することは費用、収蔵スペースの問題で誰もができるものではない。博物館や自治体の教育委員会を頼りに情報を集めて所在確認だけでも大変であり、すでに博物館、資料館に収蔵されている民具であっても、学芸員以外は閲覧申請や撮影許可が必要な場合もあり、個人調査の労力は相当なものである。

これもあって民具研究者は、公的な施設や情報収集能力の恩恵を受けやすい自治体の学芸員、文

化財関係職員であることが多い。また単に民俗学者が民具に関心がないということではなく、民具研究を促進する組織機関、制度が十分ではないのではないかと感じることもある。たしかに渋沢の薫陶を受けた宮本馨太郎や祝宮静ら働きもあって1950年(昭和25)の文化財保護法制定、1954年(昭和29)の文化財保護法改正によって、有形の民俗資料の保護に関する制度を有形文化財の指定制度から切り離し、「重要民俗資料」の指定制度が発足した。これによって有形民俗資料(民具)の調査指定が促進された。考古学の埋蔵文化財は文化財保護法によって記録保存、事業者負担が制度化・義務化されたことで、考古学を専門とする埋蔵文化財関係職員が各自治体に配置され、開発にともなう発掘されるごとに出土した資料が資料化され調査報告書が刊行される。それによって考古学の裾野が広くなり、今日、考古学者を養成する大学が民俗学者に比べものにならないほど多いことと無関係ではないだろう。

一方、農山漁村が開発される、または過疎で消滅しようとしても民俗資料を調査し、保存する確たる制度や義務は存在しない。歴史民俗資料館等が作られて民具が集められ収蔵されても、しっかりとした台帳が作成されることは限られ、調査報告書が刊行、研究がなされることはさらに少ない。民俗資料は考古学の専門職員が兼務することが多く、民俗学、さらに民具研究者の需要は少なく、よって民俗学者を養成できる大学は限られ、さらに民具研究ができる大学はさらに限られる現状がある。

私は民具研究が民俗学から独立すべきである、また民俗学に包括されるべきという極端な意見は持っていない。原点に戻り、渋沢敬三が目指した民具の資料化、そして学術資料としての活用を目指すべきであり、それに対する課題が山積しているのが現在であると考えている。将来的には埋蔵文化財のような社会全体として民具を収集、整理、研究、報告、保存を促進する仕組みづくりへの取り組みが必要と考えている。

7. メタデータの重要性

筆者は2006年頃の一時的であるが、アチック写真の整理に携わった。整理において、一番の問題は誰がいつ、どこで、何を撮影したというメタデータの少なさであった。写真は台紙などに貼られており、ナンバーリングがあるが、撮影年、撮影者、撮影場所が記載されていることは稀であった。アチック・ミュージアムの関係書籍、アチック・ミュージアム同人の著作や、撮影地が判明すればその地の自治体誌等を参考にその写真に写っている画像の被写体特定を行なった。また渋沢が会長を務めていた日本民族学協会が編集した『日本社会民俗辞典』[日本民族学協会 1957]にも比較的多くアチック写真が掲載されており、そこから何を撮影したものか判明する事もあった。その後、アチック写真の整理調査が活発となりその成果が『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真』vol. 1~8という刊行物となったが、その苦労は並々ならぬものがあっただろう。

現在であれば、デジタルカメラで撮影すれば、撮影日時、撮影機種、場合によっては撮影地座標などが画像のメタデータとして自動的に記録される。しかし当時はそのような時代ではない。

アチック写真のようなメタデータが少ない資料は、最終的に撮影地調査が有効であることはいうまでもない。しかし遠い場合、時間的、経済的にも負担が大きくアチック写真のように撮影後、約80年をも経過している場合、大きな収穫がある保証はない。

今回の研究における調査で収穫の一部を上げると、「イトマン漁船」[写真1](目録番号 写3-5-10)[神奈川大学日本常民文化研究所 2012:61]は、西ノ島の「しゃーらぶね(精霊船)」を撮影したものと判明した。そもそも被写体となった舟が小さくピントも甘い。なかなか判断が難しかった

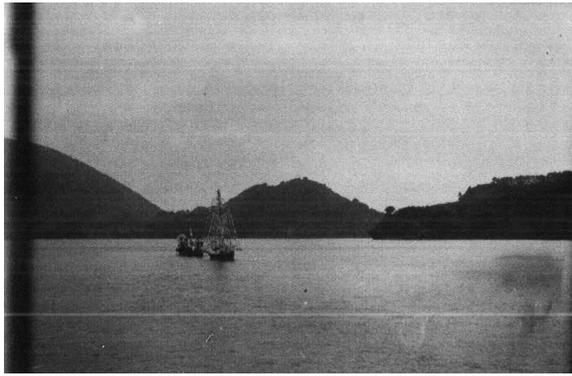


写真1 「イトマン漁船」(目録番号 写3-5-10)



写真2 展示中のシャラー舟(西ノ島ふるさと館)2016年9月13日撮影。

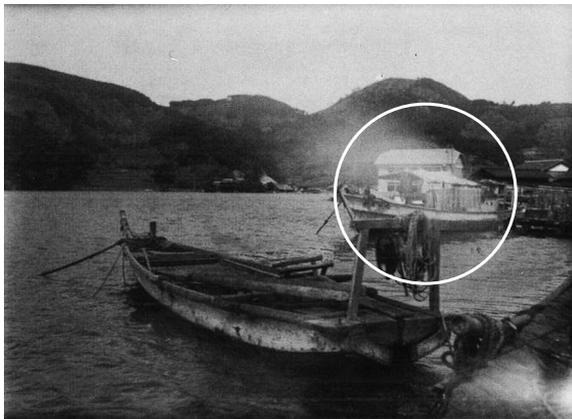


写真3 「ハギ舟と動力船(ハギ舟を曳航するための船、かもめ丸)」(目録番号 写3-5-1) 円中央が船越公会堂。



写真4 船越公会堂(西ノ島町美田船越)2016年9月13日撮影。円中央が船越公会堂。

たが、西ノ島ふるさと館に展示中のシャラー舟[写真2]を確認する事によって判明した。隠岐郡西ノ島町の浦郷・美田両地区では8月16日に先祖送りとして精霊船送りが行なわれており、山口和雄、桜田勝徳、岩倉市郎による昭和10年8月の第2回調査の日程8月12~18日とも重なる。『隠岐島前漁村採訪記』(以下『採訪記』と記す)にも「第五部 信仰生活」「一年中行事」に「盆」として、

今浦郷や船越では長さ一丈もある大きな藁製の精霊船(シヤアラ船)を組毎に一艘づゝ造り、之を十六日の朝子供達が和船で漕いで沖へ流しにゆく。船の中には盆に備えた種々の物を積み込み、子供は山くどせを唱えて沖へ漕いで行った。之は此地の古い習慣ではなく、四十年前、能義郡(現島根県出雲地方、安来市付近)出身の阪口といふ僧侶が、此地の寺の住職となり、流行らせたものであるという(平木由太その他)。

とある。[アチック・ミュージアム 1935: 144] 一見、この行事を目撃し、写真も撮影した行事の記載ではない印象を受けるが、隠岐の古い習慣ではないということが、そのような記載にしたのかもしれない。

また「ハギ舟と動力船(ハギ舟を曳航するための船、かもめ丸)」[写真3](目録番号 写3-5-1)である。『隠岐島前に於ける糸満漁夫の聞書』(8)にマワシタカミ漁の漁法説明として「午前七時頃發動船一艘にハギ船が曳かれて、之に糸満漁夫が分乗して漁場に向かふ。」とあり題名の「ハギ舟」はこれによったという。[神奈川大学日本常民文化研究所 2012: 56]

これには写真の奥に二階建ての洋風建築物が写る。これは船越公会堂(西ノ島町美田船越)とよばれる建物で改修、増築されているが現存している[写真4]。ハギ船が係留された場所は海岸線そのままに埋め立てられ、舗装道路となっている。また山並みの景観に目を向けると稜線がほぼ一致する。この撮影ポイント糸満漁

夫を雇っていた安達家の目前にあたる。

上記の例は、幸運な事例であり、誰がどこで何を撮影したか判明しない写真も多い。撮影者が撮影当時に写真を整理し、メタデータを付加することが重要で、時間が経過し撮影者自身も忘れることもあるだろうし、アチック写真のように撮影者がすでに亡くなっている後年の写真の資料化は困難な作業となる。

写真と同様に民具についてもそのメタデータが残されないことによって、学術資料としての価値が著しく減少する。アチック写真と同様に、国立民族学博物館のアチック・ミュージアム・コレクションの中にある隠岐関係資料を確認すると、約80年前の民具研究の草創期であってもアチック・ミュージアムの同人によって蒐集・整理され、民族学博物館時代も元アチック・ミュージアムの同人であった宮本馨太郎らによって整理・管理されてきたこともあり、標準名、地方名、採集地(旧村または大字まで)、採集者、寄附者、採集期、収蔵期などの基本的なメタデータが記録され、そして備考には使用方法の記載があるものもある。さらに前述のとおり『探訪記』に図入りで記載されるものあり、総括的なモノグラフの中に民具が説明されることにより、その民具をある時期の地域の暮らしの中に当てはめることも可能となる。

前述の通り『探訪記』とアチック・ミュージアム・コレクションと相互補完的關係は認められるが、お互いにメタデータに乏しいアチック写真とアチック・ミュージアム・コレクションの相互補完的關係は弱い。

しかしアチック写真から、隠岐の民具、日本海沿岸の民具であれば相互補完的關係がある。たとえばアチック写真には「磯箱、マタ(ソクマタ)など」[写真5](目録番号:河1-27-10)と題された写真がある。これは隠岐の映像記録「隠岐之島 景観 昭和九年五月」に同じ映像があるので、昭和9年5月の撮影と判明する。西ノ島ふるさと館には「ジラマタ」[写真6]と呼ばれるイカの釣漁に使用される用具があり、また島後の隠岐郷土館の「二又」や、隠岐へ冬季にイカ釣りの出稼ぎに行ったり、隠岐からイカ釣り用具や技術を導入したりしたという鳥取県東伯郡湯梨浜町泊の泊歴史民俗資料館にも「マタ」または「ソコマタ」と呼ばれ所蔵されている[写真7]。マタの隣にあるのは『鳥取県漁具圖解』⁽²⁾において「タラシ」(第四十号五図)[写真8]と呼ばれるイカ釣り用具でないかと思われる。

これらを総合すると、次のことが判明する。「磯箱、マタ(ソクマタ)など」(目録番号:河1-27-10)から、マタは、西ノ島ふるさと館や湯梨浜町泊民俗資料館に現存するものを見ると、マタの腕同士を繋ぐ軸と錘が一体化してい

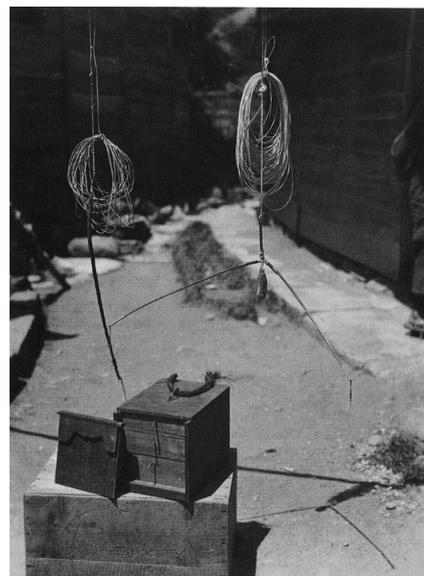


写真5 「磯箱、マタ(ソクマタ)など」(目録番号:河1-27-10) 向かって左がタラシ、右がマタと思われる。

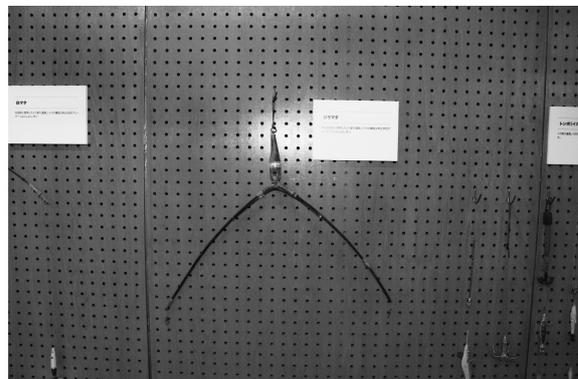


写真6 ジラマタ(西ノ島ふるさと館)。2016年9月13日撮影。



写真7 マタ (湯梨浜町泊歴史民俗資料館)。2009年10月29日撮影。

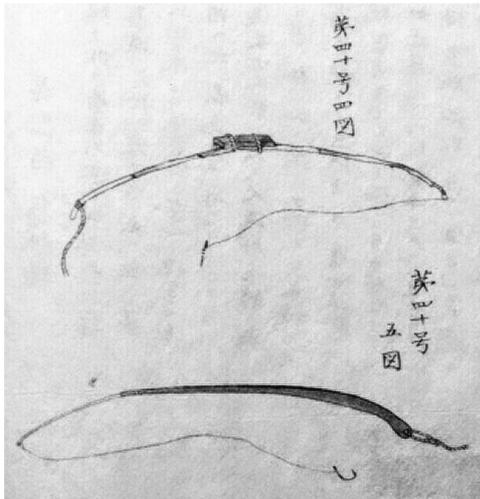


写真8 「タラシ」『鳥取縣漁具圖解』東京海洋大学図書館所蔵

るが、昭和9年にはマタの軸部分にナス型の錘がぶら下がった構造になっている。またアチック写真には『鳥取縣漁具圖解』において「タラシ」、「流鉄針」とよばれる金属製の棒のようなイカ釣り用具が写っているが[写真8]、西ノ島ふるさと館、隠岐郷土館、湯梨浜町泊歴史民俗資料館にも所蔵されてなく、衰退、消滅した漁具と推定していたが、昭和9年時点では隠岐にて確認できる資料であった。さらに『採訪記』の「第二部 漁業」「3 烏賊釣」「口 漁具」[アチック・ミュージアム 1935:47-49]を確認すると「ゴンガラ」「縵絲」「船」の記載があり「ゴンガラ」(白い布がまかれた疑似餌のようなもの)は収集も行なっているが、マタやタラシについては記載がない。ゴンガラは、マタやタラシの先に針に結ぶ糸であるハリスによって結びつけられ、マタやタラシは様々な水深にいるイカに対応する重要な漁具であるが、執筆者の山口和雄は記述も収集も行っていない。

社会経済史的側面からの漁業について調査を実施しているものの、短期間で多種にわたる漁法を調べ、さらに漁具を詳細に記録するまでには至らなかったのは当然といえるだろう。

しかし残されたわずかなメタデータを頼りにしても、資料と資料をつなぎ読み解くことは可能であり、後年のためにもメタデータをいかに記録し、残すかが重要である。今後アチック・ミュージアムと渋沢敬三研究で本格的な資料、またはメタデータとしても調査、研究、活用が期待されるものとして神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する地図がある。これは渋沢敬三が日本各地を旅行、調査した足取りを地図上に赤線で記録したもので、旅譜等を参考にして作成したものと推定される。場合によっては現地で会った人物も記載されているが、誰が何の目的で作成したかは現在不明である。渋沢敬三たちの昭和9年5月の隠岐調査の経路も記録されているが[写真9・10]、この地図の行程記録がどこまで正しいかも検証が必要である。

この地図については筆者が知ったのは、1997年頃である。その頃、網野善彦を中心とする奥能登調査研究会がよく利用していた神奈川大学日本常民文化研究所の分室があり、そこは網野を中心とした研究者のサロンのような空間であった。そこで筆者は日本常民文化研究所漁業制度調査(1949~1955)における資料借用記録の整理作業を手伝っていたが、ある常民研所員でもある教員が、この地図をその分室で広げて「渋沢さんは、『宮本君の足跡を日本の白地図に赤インクで印したら全体真っ赤になる程であろう』(渋沢敬三 1961)といったが、渋沢さんの足跡は本当に赤で地図に記録してあり、日本が真っ赤になっている」と見せてくれた。そのまま忘れていたが、今回、渋沢らの隠岐調査の行程を考えているときに存在を思い出したものである。今後、渋沢敬三、そしてアチック・ミュージアム研究に活用されるべき資料である。

8. 隠岐関係アチック・ミュージアム資料への期待と不調

「隠岐・中海の肥料藻と暮らし」[樫村賢二 2012: 96—97]においても記載したが、1905年（明治38）6月7日には隠岐から来た藻採船が日本海海戦で負傷溺死したロシア兵の死体を境港に積んできたという記録があり⁽³⁾、またその船は隠岐国知夫郡知夫村大字大澤（現島根県隠岐郡知夫村）の者の所有で美保関の七海里（約13キロメートル）沖合で死体を発見し引き上げたという⁽⁴⁾。

今日においても鳥取県境港市から米子市にわたる弓浜半島の中海側では、古老から隠岐産の乾燥藻葉を畑の肥料に使った話を耳にすることができる。

よって本調査においてアチック・ミュージアム関係資料を調査し、隠岐を訪れる機会を得て、隠岐にて盛んであった肥料用の藻葉採集に関する資料を確認できることを期待していた。

しかし結論から言えば、隠岐で期待していた藻葉採集に関する手がかりのようなものはあまり得ることができなかった。

あらためて『隠岐島前漁村探訪記』にて肥料藻に関する記述を確認すると以下のようにある。

「共有地の草木海藻類を日を決めて部落人が共同採集する事をスをとてるといふ。」[アチック・ミュージアム 1935: 23]とあり、「船越で昔から行われたスは、藻葉（肥料藻）のス、若布のス、アブラテ（樺の実）のス、花（樺）の実のス、コナラ（刈敷）のスであった。」[アチック・ミュージアム 1935: 24]「浦郷では海のスに藻葉、石花菜のものがあり、山には草刈りのスがあるだけである。」[アチック・ミュージアム 1935: 24]「黒木村の大津では藻葉のスは年に一回、口明けの日を定め、それ以外は何時採ってもよい事になっている。」[アチック・ミュージアム 1935: 24]

豊田においては「海のスはモバ（二月一日に口明け）、若布（三月十日頃口明）」で、「モバと若布のスは明治十九年以後隣区福井との入会磯となり、スの口明け一日だけは自分の磯のものを採り、それから以降は入会に之を採取してある」[アチック・ミュージアム 1935: 24]とある。

「菱では山のスは無く、昔は藻葉のみにスがあったといふ。このスの日は旧二月頃で、それ以後は菱の地下人なれば何時でもその磯で採ることができる。藻葉は自家用のみではなく、干藻葉にして伯耆の浜へ盛んに出したものである」[アチック・ミュージアム 1935: 25]。

また「手間換へ」として「知夫里ではコエモバ（自家用肥料の藻葉、伯耆方面に売り出す藻葉は乾干して之を船に積むのでホシモバという）のモバ拾ひには手間換へする風がある。手間換へには必ず

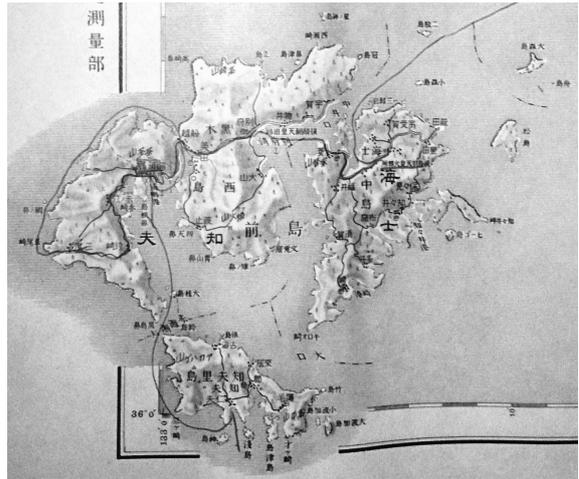


写真9 昭和9年5月の渋沢一行の隠岐島前における行程。

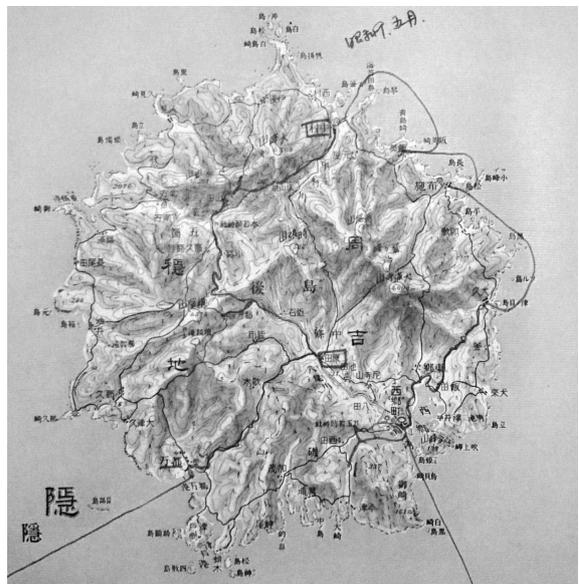


写真10 昭和9年5月の渋沢一行の隠岐島後における行程。

手間戻しがつく」[アチック・ミュージアム 1935:25] という。

島前では百姓漁が多く、その百姓漁としてのカナギなどに使用された最も古い箱船のトモドについて、「沿岸部落の者は漁業を営まぬ百姓でも一艘位のトモドをもち、耕作地に出かける場合の乗用に供し、又は肥料農産物の運搬に用いた。が、十年前あたりから次第に影を消すやうになった」[アチック・ミュージアム 1935:36] という。この記述からは肥料藻の採集や運搬にトモドが使用されたことが伺える。

隠岐の海上運搬は、コモ船とか仕立船とよばれる幅8尺(約2.4メートル)から10尺(約3メートル)くらい、長さ40尺(約12メートル)くらいで4、50石積の帆船で二人乗りで、これで内地に塩ブリや藻葉などを運んだという [アチック・ミュージアム 1935:87]。

また「農業」の「(7) 肥料」では、「牧畑耕作には殆んど肥料を使用せぬことは既に述べたとおりであるが、年々畑其他に用いられた肥料は糞尿、海藻(モバ)及び厩肥が大部分であった。昭和九年度に於ける知夫村の自給肥料は左のごとくである。」[アチック・ミュージアム 1935:108]

表2 知夫村自給肥料生産高

1	人糞尿	200,000 貫	750,000 キログラム
2	厩肥	88,000 貫	330,000 キログラム
3	海藻	12,000 貫	45,000 キログラム
4	灰	11,250 貫	42,188 キログラム
5	堆肥	4,500 貫	16,875 キログラム
6	蚕渣	4,000 貫	1,500 キログラム
7	緑肥	1,700 貫	6,375 キログラム
8	鶏糞	440 貫	1,650 キログラム

*順位は・キログラム換算は著者が加筆

とあり、その頁に掲載されている表によると肥料藻は、自給肥料の第3位である [表2]。この内に自家用海藻藻のほか販売用乾燥藻葉が含まれるかは不明である。

近代日本においては1887年(明治22)には、高峰讓吉・渋沢栄一によって東京人造肥料会社(現日産化学)が創立、1908年(明治41)には野口遵・藤山常一によって日本窒素肥料会社(現チッソ)が設立され、1941年(昭和16)には硫アン換算での化学(窒素)肥料製造は124万トンにおよび [尾和尚人 2006:9—13]、隠岐調査が行われた昭和初期には化学肥料が自然肥料を上回る状況だったといわれる。「干藻葉にして伯耆の浜へ盛んに出したものである」という言葉からは、すでに伯耆への出荷があまり行われていないニュアンスを感じる。また肥料農産物の運搬に用いたトモドが「十年前あたりから次第に影を消すやうになった」[アチック・ミュージアム 1935:36] とあるように、昭和初期にはトモドも姿を消し、肥料藻の採集も衰退がはじまっていたのかもしれない。

桜田の『八束の海辺』「昭和9年5月下旬」(本書所収)には、隠岐ではないが島根半島の七類(島根県松江市美保町)の聞き書きとして「スをたてるはワカメ、テングサ(以前はモバ、アラメをもたてた)。とめてをいたスをあける事をスアケルといふ」とあり、モバのスがすでに無くなっていることが伺える。

このように比較的肥料藻に関する記載は多いものの、アチック写真や国立民族学博物館のアチック・ミュージアムコレクションの民具、渋沢フィルムにもそれと確信できる資料などについての記載はない。藻葉採取の口明けが2月であり、山口、桜田の調査が8月であるため時期にずれがあるためその様子を確認できなかったことの影響もあるだろう。

しかしながら隠岐郷土館や西ノ島ふるさと館の民具資料にもワカメガマやテングサツキなどの食用藻の採集用具は見られるものの、肥料運搬に使用したというトモドが西ノ島ふるさと館に収蔵されている以外、肥料藻に直接関係する民具は確認できていない。そもそもどのような道具を使用して、どのように採取したのかが不明である。島根県と鳥取県にまたがる中海では、ハサミダケや、モバクワ、モバケタなど採取方法も道具も多数あった [櫻村 2011]。また藻葉といっても種類が多様であったとも想定できる。現時点では隠岐の肥料藻とその採集の実態は謎が多いままである。

肥料藻採集と利用は、漁業と農業にまたがり生業の境界域にある。これは社会経済史的視点からは重要な課題と思われるが、隠岐において肥料藻とその採集に特化した調査は実施されていない。

現在でも肥料藻採集についての記憶を持つ古老もいる可能性がある。先行した調査の空白を埋めるのは我々の役割であろう。

9. おわりに

アチック・ミュージアムの活動は、日本で最初のモノグラフともいわれる早川孝太郎の『花祭』、そして『隠岐島前漁村探訪記』をはじめ多くの調査報告を行った。また民具研究の基礎を築き大量の民具資料を収集、またアチック写真をはじめ昭和初期の貴重な画像資料を生み、渋沢フィルムとして映像資料も残した。それらの各資料の重要性は皆が認め、今日も興味をもつ研究者も多い。渋沢敬三はこれらの資料は日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）を拠点として保存、研究、公開を考えていたと思われるが、それはかなうことなく、さまざま不幸な運命から資料が分散し、整理公開がままならない状況が続いてきた。

それが神奈川大学日本常民文化研究所、渋沢史料館、国立民族学博物館、宮本記念財団などアチック・ミュージアムの系譜を引く各組織の努力によって、整理、公開、研究が進められている。その努力は、今後さらに連携して進められることが望まれるが、本文もいささかのその役割を果たすことを願うばかりである。

参考文献

- アチック・ミュージアム 1935 『隠岐島前漁村探訪記』
- 石塚尊俊 1971 『出雲隠岐の民具』慶友社
- 上江洲均 1982 『沖縄の暮らしと民具』慶友社
- 小野重郎 1969 『南九州の民具』慶友社
- 尾和上人他編 2006 『肥料の辞典』朝倉書房
- 樫村賢二 2011 『鳥取県史ブックレット 里海と弓浜半島の暮らし—中海における肥料藻と採集用具—』鳥取県
- 樫村賢二 2012 「隠岐・中海の肥料藻と暮らし」『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol. 6』神奈川大学日本常民文化研究所
- 神奈川大学日本常民文化研究所 2012 『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol. 6』
- 桜田勝徳 1958 「村とは何か」大間知篤三ほか編『日本民俗学大系』3 平凡社
- 渋沢敬三 1933 「アチックの成長（1933年9月記）」『祭魚洞雑録』郷土研究社（1992『渋沢敬三著作集』第1巻、平凡社）
- 渋沢敬三 1961 「わが食客は日本一努力の民俗学者宮本常一君のこと」『文藝春秋』61年8月号
- 日本民族学協会 1957 『日本社会民俗辞典』誠文堂新光社
- 早川孝太郎 1930 『花祭』岡書院
- 早川孝太郎 1958 『花祭』岩崎書店
- 宮本馨太郎 1969 『民具入門』慶友社
- 宮本常一 1979 『民具学の提唱』未来社
- 山口和雄先生古稀記念誌刊行会編 1978『黒船から塩の道まで—研究史的回顧—』財団法人日本経営史研究所

注

- (1) データに関する諸情報を記述したデータ。写真ならばいつ、どこで、誰が、何を撮影したというデータ。
- (2) 東京海洋大学図書館所蔵、編さん年不明。明治期カ。
- (3) 「境尋常小学校 明治38年度学校日誌」（境港市立境小学校所蔵）
- (4) 『山陰新聞』（明治38年6月10日）